２０２５年５月２５日復活節第６主日説教

旧約聖書（代行）使徒言行録１６章９―１５節
ヨハネの黙示録２１章１０、２２節―２２章５節
ヨハネによる福音書１４章２３－２９節

２０２５年の復活節も第６主日を迎えました。今週の木曜日に昇天日を迎えます。今年も管区から「祈りのしおり」が刊行されました。今年も、このしおりを用いて、誰かのために祈り、世界が少しで平和になることを待ち望みたいと思います。

さて、本日の福音書は、先週と同じくヨハネ福音書です。本日の部分は、１４章１節から始まる、イエス様が受難を前にして弟子たちに様々な教えをする場面の一つです。お話の時間的流れとしては、受難の前の事柄です。しかし、内容としては、弟子たちを通して、今、イエス様を信じている人たちに、イエス様が大切なことを語っています。

１４章について簡単に触れますと、１節から１４節は、小見出しで「イエスは父に至る道」とある箇所です。その一部は、通夜の祈りでも用いられています。また、６節には、「**私は道であり、真理であり、命である**」という有名なイエス様の言葉があります。１５節からは、イエス様が弟子たちに聖霊を与える約束をします。聖霊は、「**弁護者**」（ヨハネ 14：16）と表現されていますが、「**真理の霊**」（ヨハネ 14：17）ともいわれています。それらから、イエス様と父なる神様が一体であることが強調され、そのイエス様が弟子たちに対して、聖霊を送るように願ってくださっています。間接的ではありますが、三位一体という事柄が示されているのです。

さて、本日の箇所は、「**イエスは答えて言われた**」（ヨハネ 14：23）と始まります。それは、直前の２２節に「**イスカリオテでないほうのユダが、イエスに言った。『主よ、私たちにはご自分を現そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、なぜでしょうか』**」とあるからです。このユダは、マタイ・マルコ福音書の弟子一覧には登場しません。しかし、ルカ福音書の一覧にあるヤコブの子ユダ（ルカ 6：16）であり、そこからマタイとマルコでタダイと呼ばれる人だろうと推測されます。また、「現す」という言葉は、「現」という漢字があてはめられている通り、具体的に見える形で示すことを意味します。「ではないほうのユダ」は、今目の前にいる自分たちには見える形でイエス様は現れてくださったのに、「世（世界）」にはなぜそうしないのですかと質問したのですが、その質問が意味する内容は、さらに深いものがあります。そのことはその質問に対する答えからわかります。

イエス様の答えが本日の箇所ですが、イエス様は明確な表現で答えていません。まず「**私を愛する人は、私の言葉を守る。私の父はその人を愛され、父と私とはその人のところに行き、一緒に住む**」（ヨハネ 14：23）と語り始めます。「世（世界）」に具体的にご自身を示されないのはなぜですかという問いに対して、イエス様は、イエス様を愛するか否かについて語り始めたのでした。お話がかみ合っていません。ここでも、ヨハネ福音書の特徴が表れています。しかし、そ

うであるがゆえに大切なことが示されるのです。

そもそもイエス様がご自身を世界に具体的に示されることとは何か、それを理解するためには、イエス様とは誰であるかを明確に知ることが大切であるからです。そしてそのように知るためのさらなる前提として、主なる神様を信じることが大切な事柄なのです。１４章の冒頭で、イエス様が「**心を騒がせてはならない。神を信じ、また私を信じなさい**」（ヨハネ 14：1）と語られた通りです。１４章は、次に大切なこととして、「**私が父の内におり、父が私の内におられると、私が言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。**」（ヨハネ 14：11）とイエス様ご自身、つまり子を信じるようにと教えるのです。そして、最後に、本日の箇所ですが、聖霊について教えており、あなたがたに聖霊を遣わすと教えているのです。

本日の箇所でイエス様は「**私は、あなたがたのもとにいる間、これらのことを話した**」（ヨハネ 14：25）と語ります。そして次に「**しかし、弁護者、すなわち、父が私の名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、私が話したことをことごとく思い起こさせてくださる**」（ヨハネ 14：26）。たった１節しか進んでいませんが、ここは過去と未来が混在しています。十字架の出来事の前の時としてイエス様がおられた時、弟子たちは直接教えを受けた。しかし、今は、すなわち十字架と復活後の弟子たちとそれ以後の信仰者たち、今日のわたしたちたちも含めて、イエス様はおられないが、聖霊を通して時間を超えて教えを受ける。だからこそ、今もイエス様はおられるのである、ということです。父と子と聖霊は一体であるからです。ヨハネ福音書の時代は、まだ三位一体という言葉も神学も確立していません。しかし、ヨハネ福音書は、信じようとするとき、神と子と聖霊が、深くかかわっていることを示していたのです。

イエス様は、そのように弁護者である聖霊を遣わすと約束していますが、それにも前提があります。それが本日の箇所の冒頭にあります。「**私を愛する人は、私の言葉を守る**」です。「私の言葉」とは、新しい律法ではなく、イエス様に従って「互いに愛し合うこと」です。それは先週の福音書にあった「**あなたがたに新しい戒めを与える。互いに愛し合いなさい。私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい**」（ヨハネ 13：34）という言葉にほかなりません。そして、その時、父と子と聖霊なる主なる神様をわたしたちが信じて、教会を通してたがい愛し合う時、「**私は、平和をあなたがたに残し、私の平和を与える。私はこれを、世が与えるように与えるのではない**」というイエス様の言葉がわたしたちに響くのです。

今、世界は全く平和ではありません。平和どころか、各地で戦いの準備が始まっています。先進国で、その戦いの準備に、良い意味でも後れを取っているのは、わたしたちの国ぐらいでしょう。しかし、そのような世界、世を嘆く前に、わたしたちはイエス様から宿題を与えられています。それは、教会が互いに愛し合うことです。その具体的な現れを示すことです。その具体的な現れにもいろいろあると思いますが、最も基本的な事柄は、誰かのために祈ることです。その祈りの歩みが、今年も始まります。知らなければならないこと、考えなければならないこと、行わなければならないこと、それらはたくさんありますが、まず誰かのために祈りたいと思います。